OUKA
Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 『女性における「処女性」に関する臨床心理学的研究』 : 「少女性」との対比から |
| Author(s) | 藤澤, 佳澄 |
| Citation | 大阪大学教育学年報. 2002, 7, p. 155-166 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/7583 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# 『女性における「処女性」に関する臨床心理学的研究』
## ――「少女性」との対比から

藤 澤 佳 澄

**【要旨】**

本論文では女性にとって重要な意味があると思われる「処女性」に関する考察を、臨床心理学的視点から行った。「処女性」とは女性における性体験の有無を示すのではなく、古代ギリシャにおける「処女」、すなわち「パルテノス」の意味に由来する、女性の独立性、自律性を表している。聖母マリアの有名なエピソード、「受胎告知」からそのイメージを明らかにし、更に「少女性」との比較から心理学的な意味付けを試みた。「少女性」とは「少女」という言葉に連想されるような、「何にも制限されず、自分のなりたいもの何にでもなることができる」自由な意識そのものでもあり、またそのような「自由」を追い求める心性でもある。このような「少女性」を『旧約聖書』中のイブを通して明らかにし、マリアの「処女性」との比較を行った。自分の思うままにならない、どのような現実を受け入れても揺るがない独立性が「処女性」であり、それを備えていたからこそ、マリアは彼女の身に起こった思いもがけない運命を受け入れることができたのである。このような「処女性」を獲得することは女性にとって、ひいては男性にとって意味があると筆者は考え、本論文で定義することを試みた。

### 1 はじめに

人間が生きていく上において、必ず到達しなければならない心理的な発達段階がある。例えば母子分離の過程など、そこへ到達していなければ、生きていく上で困難を経験するようなものである。一方で、必ずしもそこまで達していなくても良いが、そこまでの段階へと到達できるとより良い人生が送れ得る、そういう心理的な段階も存在する。筆者が本研究で論じたいのはむしろ後者に属するのかもしれない。誰もがそのような心理的に高次なプロセスへと進めるかと言えば、それは難しく、それ故に、ある種理想像として描かれる話であるかもしれないとは思う。けれども、そのような理想的な段階へと進むことが難しいからと言って、高次の、神話的なプロセスについて述べることが無意味であるかと問われれば、筆者はそうではないと考えている。

今回、本論で述べるような「処女性」にせよ、備えなくても生きていくには困らないが、その一端を垣間見ることで人生をより良く生きていくための支えに出来得る心性もある。また、心のケアを扱う臨床場面において、臨床家がそのようなプロセスを念頭に置いていることで、有用に治療に働かせることもできるかもしれない。

本研究で扱うのは、そのような「付価値」的な属性ではあるかもしれないが、心理臨床の現場において、また心理学的な展望において、一つの有益な指針になりうればと考えている。

### 2 聖母マリア

#### 2―1 受胎告知

キリスト教において最も有名な逸話に「受胎告知」と呼ばれるものがある。大天使ガブリエルが、マリアに処女懐胎を告げに来るというのがそのエピソードであるが、以下に簡単に、マリアと大天使の遣り取りを述べておく。

大天使ガブリエル「おめでとう、恵まれた方。あなたは、あなたの神である主から恵みを受けたので

す。あなたは男の子を産み、その子をイエスと呼ぶようになります」
マリア「どうしてそのようなことがありましょうか？　私はまだ男性を知りませんのに」
(中略)
マリア「私は神のはしためです。お言葉どおりに、この身に起こりますように」
『新約聖書・ルカ伝・第一章』

これは不意にマリアの前に現れた大天使ガブリエルから、マリアの受胎を告知される場面の一節である。マリアは懐妊について思い当たることはないと、当惑の中で大天使に応える。ガブリエルは「懐胎は聖霊によるもので、生まれる子は神の子となる」と告げる。マリアが畏怖しつつも、大天使の言葉を受け入れることでこの有名な場面は終幕する。

ここでマリアに伝えられる伝承について述べておくと、マリアはヨアキムとアンナの娘として生まれ、巫女として12歳まで神殿で育てられた。(竹下　1998) 12の年に聖霊によって選ばれた年長の夫、ヨセフに嫁ぎ、14歳で身篭り、告知を受けたとされている。カトリックの典礼上ではこの受胎告知の日は3月25日とされ、この日はキリスト教の祝祭日となっている。

聖母マリアに関する心理学的・神話学的解釈はあまりに多く成され、ここで全てを述べることは不可能であろう。古い神々を廃し、キリスト教が人々に浸透していく中で、それまでに奉られていた女神の系譜を聖母マリアが引き受けていったことはあまりに良く知られているが、今回はそれについては特に述べない。この受胎告知の場面に見られるマリアの「処女性」について、それだけに焦点を当てていくことが、本研究の論旨に最も相応しいと思われるからである。

さて、この「受胎告知」の場面でマリアは突然の天使の来訪に戸惑い、その申し出に狼狽を隠せなかった。「あなたは身篭りました。怖がってはいけません」と告げられたものの、彼女は若干14歳、約2000年前と現代の寿命感覚にずれはあるにせよ、マリアは神殿の巫女として育てられたため男性経験はなく、だからこそ、彼女には妊娠に思い当たる節がなかった。告げられた内容は、マリアにしてみれば荒唐無稽なものであり、普通であれば反駁するか、それこそ拒否したところで不思議ではなかっただろう。マリアは現代的な意味での「処女」であったとされ（真実のところはどうであれ)、それ故に彼女の懐胎は「奇跡」として宗教的に重きを置かれていることは言うまでもない。

## 2—2　「処女」

ここで少し話題は転換するが、歴史学的な「処女」の意味の変遷について述べておきたい。

現代的な「処女」とは一般的に男性との性体験の無い女性を指すものであり、「処女性」とはそのような女性の属性を意味していると考えられる。現代では処女膜の有無などで「処女」であるか否かの真偽を確かめられることもあるが、そもそも処女膜という生物学的な器官の発見自体、極めて最近の出来事であった。(小田　1996) これは「処女」という言葉そのものが登場した19世紀以降の医学的知識であって、普遍的な観念ではない。経験的に、女性の破瓜の際に出血が認められることは知られていたのかもしれないが、これが必ずしも万人の現象であるか否かは、疑われて然るべきであろう。女性の性体験に関する、男性の潔癖なまでの関心については本旨から外れるため敢えて詳述しないが、このような意識はまた極めて近代的であり、古代の母権制社会においては、生まれてくる子の父親を認定する習慣すらなかったことは付け加えておく。

文明化される以前の母権社会、乱婚社会においては、男女は無差別に婚を通じていた。その結果、女性が妊娠した子の父親を特定することは難しく、だからこそ子の父親は母の「夫」という続柄を持つ人間でしかなかったのである。このような文化においてはいわゆる「処女性」－夫となる男性と婚を通じる以前に、彼以外と性交渉を持ったかなどと考える概念などは勿論存在せず、つまり現代的な「処女性」とは子の父親を特定しなければならなくなった、父権制社会以降の産物であると説明できる。古代ギリシャにおいては既に母権制から父権制への移行が見られるようになっていたが、この時点でさえ「処女」とは「誰にも従属しない女性」という意味でしかなく、性体験の有無とは無関係であったとされている。私生児を

持っている女性でさえ男性に依存していなければ、「処女」＝「パルテノス」と呼ばれたのである。父権制の基盤が固まるにつれ、このような女性たちの地位は低下、ある男性の妻という誰かに属した女性の地位が高まってきたのだという歴史的な経緯があり、その中で女性の潔癖性が強く求められるようになったと推測できる。特定の男性に属する特定の女性は、そのほかの男性に従属した（＝性交渉を持った）ということがあってはならない、そのような価値観の中から現代の処女性の意味が派生してきたのであって、元々は父権制を乱さないための必要条件、妻の子の父親を特定するための女性への規制でしかなかったのである。現在の処女性の根本とは、結婚以前に男性を通わせたことの無い女性、つまり、婚姻後に子を孕んだとき、そのこの父親を明確に特定するためのシステムだったと考えられる。(Devereux 1994)

現代の処女性と本来のそれとは意味が大きく異なっていると、このような経緯からも容易に理解することはできる。ここで、聖母マリアの逸話に話を戻して、本来の「処女性」についての考察を加えていきたい。

### 2—3 「処女性」とは

マリアは「受胎告知」の場面において、まさに「思い当たる節の無い」「父親のわからない」子を懐胎したことを告げられる。理不尽な告知だと、理解しかねる話だと、彼女が突き返したところで無理もない報せに違いなかった。けれども、マリアは「何故」とその身に起こった不可思議について理由を問い返すわけではない。「どうして起こるだろうか」とは反意疑問であって起こりうるはずがないのに、という意味に過ぎない。マリアは結局には、何故彼女の身にそのようなことが起きたのか、を大天使に問い掛けるではなく、大天使を追い返すでもなく、彼女の運命を受け入れることを選んだのである。「仰るままになるように」という彼女の態度は受容的であって、けれどもそれはただ単になされるがままに押し流されている受容性ではない。戸惑い、疑念を抱きながらも、マリアはわからぬことはわからぬまま、ありのままを受け入れるという態度を示している。(玉谷 1985) 彼女の身に起きる「全て」を知りたい、知らねばならないと無闇に問い掛けることはしない。彼女自身把握しえない、制御できないことはあるがままとして、受け入れることを自ら選んでいる。そのような絶対的な運命、彼女の智慧では理解できないこと、彼女の手では制御できないことがその身に起きたからと言って、マリアはそれによって何を揺さ振られることがないからである。絶対的な独立性を備えていればこそ、彼女は彼女の手に負えない世界をも甘んじて受け入れることが可能になる。どのような運命を前にしても、「受け入れること」を選べるのである。このような「絶対的な独立性」、そしてそれ故に叶う「主体的な受容性」こそが「処女性」の本質であって、この「処女性」を備えればこそ、女性は「穢れ」ないのである。「処女性」の本質はその「穢れなさ」であると考えられるが、それは、どのような運命を受け入れても揺るがされない自律性、独立性に由縁する。

古代ギリシャで「パルテノス」と呼ばれた「処女」の本来的な意は「誰にも従属しない女性」ということであったとされるが、これは「処女性」の本質的な意味に由来するのではないだろうか。

## 3 女性にとって避けられぬもの ——血のイニシエーション

聖母マリアのエピソードを眺めたときに、女性には避けては通れぬ運命があるということがわかる。それは幾ら問い掛けたところで、ある日突然、思いもがけずやってくるものでもあるだろうし、何故と尋ねた所でその本質的な理由など我々には計り知れないものでもある。女性はその身体を通してイニシエートされるというが、そのイニシエーションこそ女性が女性自身、掌握できない一つの運命でもある。

女性のイニシエーションは血と密接に関わっていると言われる。初潮に始まり、破瓜、妊娠、出産と心身が成熟していく過程には必ず血が伴う。このような身体の変化は女性自身に意識されないまま、意図されないまま神秘の内に内界で生じるのであり、彼女の意思では制御できるものではない。逆らおうとどれほど試みたところで時がくれば否応無しにこのような身体の変化は生じ、この身体的な変化を通して女性はまたイニシエートされていく。このようなイニシエーションは女性にとって特有であるが、この「受け入れるしかない」というあり方が、この儀礼の本質であると考えることはできるだろう。女性のイニシエ

ーションは、「ありのままを受け入れるしかない」、彼女の身に起こることを「ただ、受け止めていくしかない」、という態度を繰り返していくことが一つの本質でもあって、その中でこのような絶対的な受容性を獲得していくことができるのかもしれない。絶対的な受容を強いられる過程を経ることで、揺るがない自律性を備えていけるようになるということが、この通過儀礼の意義であると考えることもできるだろう。

自らの理解を超えるからといって、自らの思うままに制御できないからといって、彼女の身に起こる現象を否定し、撥ね付けて生きていくことはまた、女性にとって難しいことでもある。全てを自身の意のままに制御したい、彼女の世界全てを知りたい、そう欲望することは「傲慢」でもあり、それは「少女性」と呼ばれる心性に属するものである。これは、ここまで述べてきた「処女性」とは対極をなす心性でもある。

## 4「少女性」とは

「処女性」と一見類似しているようでありながら、以上に述べてきたような意味で「処女性」とは異なる心性を、ここで定義したいと思う。それは「少女性」と称されるべきものであり、この「少女性」の定義は高原（1999）の「少女型意識」というものに拠っている。高原はこの「少女型意識」の命名の理由を「これが決して現実の少女にだけ独占されるものではないことを示すため」としているが、この高原の説明からも、以下に述べていく心性が少女のみに見出される意識ではないことが理解されるだろう。より普遍的な、「少女」ではない我々にとっても親近な心性であることが理解できる。「少女」という言葉により凝縮されうる心性、そういう種類だと考えるべきである。元々は「少年」（男色が流行した時代のお稚児など）にも見出される意識、性質であると高原は述べているが、ここでは少女性、少年性のその類似点、差異については敢えて触れずにおく。

「少女型意識」すなわち、「少女性」が求めるものとは「自由」と「高慢」であり、それ故に「少女性」はこれを持つ人格を押さえ付けようとする圧制的な力を何より嫌う。彼女（ここでは少女性を持つ女性を扱うため）を押さえ付けようとする支配的な原理への鋭い批判と自己主張を抱き、そこから逃れたいと「自由」を渇望し、押さえ込もうとする枠に自分だけは納まるまいと懸命に抗う。支配的な原理とは、男性権威主義的な社会原理であることも多いのかもしれない。押さえ込もう、束縛しようとするあらゆる力に屈しないという「高慢（誇り）」こそが「少女性」の本質であり、高原はこのような性質を「少女」を扱った多くの小説、文学の中に見出している。

「少女性」とはどのような性質であるか、より具体的に高原（1999）の言葉を借りて以下に記す。「少女型意識」、つまり「少女性」は、「意識はいかなる形を取ることもでき、何にでもなれるという感覚、自己が多様でありうるという感覚、それが外部から固定されず、自在に選択できるという感覚、また次に何が自己であるかさえ予期できないという感覚、これらを押えつけずにいられる状態」を「自由」であると考え、その「自由」を追い求めるようとする。「ただ一つの主体に自己の全てを担わせようとするシステム（筆者注：男性優位社会など、女性の役割、母、妻などをして女性の自我を担わせようというシステムのこと）へ批判的でもある。」「自我の多様性、多重性、可能性」を何より尊び、「その自由を阻害し、全てでありうる筈の自分をただ一箇所に収斂させようとする外からの圧力全てに反発する。」

「少女性」とはまた、世間的に好ましい（とかつて思われていた）女性のあり方、母、妻としての役割を引き受けることで、個としていられなくなることを恐れる感覚でもある。またそのような世間的な役割から抜け出そうと試みるために、「少女性」はまた「異端」「変人」というレッテルを張られてしまうことにもなる。

「少女性」を持つ女性（少女と呼ばれる年代に拘る必要はない）は「母」という役割に押し込められることを恐れるために、「子どもを産む」ということを拒絶する。理想的には無論、子を産んだからといって「母」という役割に占有される理由はないが、社会はどうしても子を産んだ女性に「母」という役割を与えたがる。配偶者を持つ女性に「妻」という役割を与えたがる。「少女性」とはこのような無個性化を認めないという批判的な態度であり、必ず主体批判的に抵抗することがその本質である。抑圧されればそ

の圧力に対して必ず反抗するような態度が「少女性」の本質であって、それはあらゆる自律性を尊び、あらゆる他律的な限定を避けて逃亡しようとする。

このような「少女性」にとっては、制御できない自己の身体でさえ、「他者」、「抵抗するべき外的な力」になりうる。自分を「女」にするまい、「女」になることを恐れる心性が「少女性」の本質の一つであることには違いないだろう。すなわち、意のままにならない女性としての身体、時がくれば初潮を迎え、彼女自身理解し得ないところで子を孕む、そのような自分自身であって自分自身の制御し得ないものへの畏怖でもあるだろうし、またそこから押し付けられる社会的な役割への恐怖でもあるだろう。どちらも「少女性」を備える自我の自由を失わせるものだからである。

## 5 原初の女性 ——イブ

ここまで述べてきたように「少女性」とは、どのような力にも支配されたくない、彼女の周囲の世界をむしろ彼女自身の支配下に置いておきたい、彼女の世界全てに彼女の意思を働かせたいという、そのような心性でもある。マリアに見出せた「処女性」が、彼女の身に起こる出来事全てを甘んじて受け入れ、それでいて揺るがない独立性、自律性であるとするならば、「少女性」とは意に染まない出来事に抵抗することで守られる「穢れなさ」であると考えられる。そのような圧力に立ち向かった結果守られる「穢れなさ」である。「穢れなさ」、という意味で「少女性」と「処女性」は類似性を持つが、この二者の類似性と相違点に関しては後に詳細に考察したいと考える。まずはここでは、その二者の比較をより明確にするために、「少女性」の特質の一つである「傲慢さ」を読み取らせてくれる「原初の女性」イブの逸話について述べたいと思う。イブとは旧約聖書に見られる最初の女性であり、最初の男・アダムの妻である。イブは楽園において禁断の果実を口にし、「原罪」を生んだ女性とされている。

『旧約聖書－創世記』においてイブはアダムの妻として彼の肋骨から作られた。二人は豊かな楽園に住まわされ、ただ一つの禁忌を犯さない限りは、その安住を保証され、守られていた。ただ一つの禁忌とは「(エデンの) 園の中央にある木の実を食べてはいけない。また触れてもいけない。おまえたちが死ぬといけないからである」というものであるが、イブはエデンの園にいた蛇に唆され、ついにその果実を口にしてしまう。「いいえ、あなた方は死にはしません。それを食べるとあなたの目が開かれ、善悪を知り、神のようになれることを神は知っているからです。」だから神は禁じたのだと、蛇はイブを唆した。

件の実とは「知恵の実」と呼ばれるものであり、イブはアダムにも分け与えた。それを口にした結果、二人は共に目を開かれることになり、互いが裸であることを知るようになる。二人は自分たちが裸であることを恥ずかしいと感じ、神ヤーウェの訪れの際にもその身を隠してしまった。こうした彼女たちの自意識が、神に二人が禁忌を犯してしまったことを知らしめることとなり、二人は神よりこのような質疑を受けることとなったのである。

「誰があなたの裸であることを教えたのか。おまえは私が食べてはならないと命じておいた木の実を食べたのか。」

アダムは答える。「私の連れとしてくださったあの女が木からとってくれたので、私は食べました。」

これを耳にした神はイブに「何ということをしたのか」と問い詰め、イブは「蛇が私を迷わしたので食べました」と答えた。イブはその結果、原罪として産みの苦しみを与えられるようになったとされている。

「私はあなたの産みの苦しみを大いに増す。あなたは苦しんで子を産む。それでも尚、あなたは夫を慕い、彼はあなたを治めるだろう。」と。イブはその原罪故に、苦痛を伴った出産を運命付けられた。同時に男性への従属も自明のこととされ、女性にとっての男性との関係や出産は、イブによってネガティブなもの（＝原罪の産物）となったのである。

禁忌を犯したアダムとイブは安住の地、エデンの園から追放され、苦難に満ちた運命を辿ることになる。

ここまで書いてきたのはイブの「原罪」と楽園追放に纏わるエピソードであるが、この「原罪」によってイブとマリアは対比される。イブが「不信」によって犯した罪を、マリアが信仰によって解放したと、イブが好奇心によって転落させた人間の地位を、マリアの「不知」によって回復したと表現される。

楽園追放に至るまでのこの場面についても述べるべきことは多く残されているが、その前に結論だけを簡単に記述しておきたい。それはまさにイブとは、彼女の手に追えないもの、知らなくても良いものを無理に知ろうとしたが故に罪を犯すこととなった女性であり、彼女の態度は「物事を知らずしては受け入れられない」というものに他ならなかった。神はイブに（無論アダムに対しても）「無知」であることを求めていた。理由は聞かせずとも、彼女達に対して盲目的に受け入れることを望んだのである。この場合の盲目的とは否定的な意味では勿論、ない。見なくても良いものは見なくて良いものとして、「それは人間の手には負えないのだから」秘密のままにしておくことを求めたのである。彼女の理解を越えるものであってさえ、だからこそ、理解できないものは理解できないままに一心に受け入れることを求めていた。イブは蛇の誘惑に唆され「知りたい」という自分を殺すことができずに、「知恵の実」を口にすることになったが、イブが体現するものは、一つは「好奇心」である。これは「知りたい」という欲求であり、「知らねばならない」という態度でもある。「知る」ということは、世界を彼女の理解の下に置くことであり、彼女の世界を、その秘密を知ることは、世界に彼女の意思を働かせる第一歩でもある。人間が本来知ることのできない秘密を垣間見たいという欲求は、世界を彼女の意の下に置きたいというそれでもあって、それはまさに「高慢」である。「少女性」とはこのような意味の「高慢」でもあって、イブに垣間見られるある種の邪気のなさは、この「少女性」に由来するようにも見て取れる。

「少女性」を備えた女性は、時に彼女自身の身体さえ、思うままにならないと否定するが、人間の身体の神秘を制御しようということはまた不可能な仕業であることは言うまでもない。それでも「少女性」は知りたいと、彼女の意のままにしたいと切望し、彼女の思うままにならない「力」に抵抗することもある。「自由」を渇望する心性は時にそのように働くこともありうるのである。

## 6 イブとマリア ——「少女性」と「処女性」

「少女性」は世界を自分の支配下に置くことを切望する。「少女性」とはそれを持つ個人を押さえつけようとする力、支配しようという力に抗う心性であり、何ものからも自由でありたいと切望する心性でもある。そのためには「少女性」はその身に起きる現実、世界を全て掌握していなければならず、だからこそ「不知」は許されない。イブが禁断ときつく戒められて尚「禁断の実」に手を伸ばしてしまった態度はこの意味で「少女性」に由来するだろう。何も知らされないままで、「絶対的に世界を受け入れよ」、と命じた神に対してイブはその禁忌を守れなかったわけであるが、これはマリアの、理由を問い返さずして受胎を受け入れた絶対的な受容の態度とは対極をなすものである。

イブは蛇に勧められるままにその提案を「受け入れた」。イブに持ちかけた蛇が象徴するものは、一つにイブの好奇心とも解釈でき、つまりはイブの分身とも読み取れる。禁忌とされている果実に手を出すことを良しとしてしまったイブの中には、そうしてさえ「まさか自分が罰せられる」という想像が働いておらず、だからこそイブは簡単にその罪を犯してしまった。「それだけは犯してはならない」ときつく罪を戒めていた神でさえも、イブの「少女性」の前では彼女を制御する力足り得なかったのである。「少女性」は時には極めて無邪気であるが、それは「彼女にとって不都合なことなどこの世界に起こりえない」と一心に信じられる、そのような心性に頼るものと考えられる。そしてこのような心性は「高慢」である。「少女性」は彼女を取り巻く世界隅々にまでその意思を行き渡らせたいと切望するが、これは全く神の仕業に他ならないと言えるだろう。「少女性」とは彼女が思い描く万能像、絶対的な理想像に「なりたい」と憧憬する心性であると高原（1999）も述べているが、この意味においても「少女性」とは「神になりたいと憧憬する」心性と考えることもできる。

だからこそ、「少女性」においては、禁忌は禁忌足り得ず、容易にその則を踏み越えてしまう。地に足の着かなさ、浮遊感こそ「少女性」のまた一つの特質であると説明できるが、彼女を縛り付けるものはその世界においては何も無い。「少女性」は「知りたい」と思うままに「禁断の果実」に手を伸ばし、「彼女を取り巻く世界を掌握したい」という切望を満たす。楽園の蛇はその実を口にすると「神のようになれる」と唆したけれども、イブはその誘惑に勝てなかったと言うことになる。

グリム童話『トルーデさん』に登場する主人公もまたこのような「知りたい」誘惑に勝てなかった少女であるが、彼女は好奇心に唆されるままに、恐ろしいトルーデさんに会いに行ってしまう。トルーデさんは魔女であり、魔女のありのままの姿を垣間見てしまった少女はその身を棒切れに変えられてしまい、暖炉で燃やされてしまうという末路を辿ることになった。この少女もまたイブ同様「知らなくても良いもの」を知ろうとしてしまったために、致命的な運命に従わされることとなったと考えることができる。イブはアダムと共に楽園を追放され、『トルーデさん』の少女はまさに死を迎えることとなったのであるが、これらは、「少女性」の行き過ぎた「高慢」が、自己を殺すという一つの例と読み解くことができるのかもしれない。一方でこのような「高慢」、ひいては「好奇心」こそが、それまで彼女たちが生きていた世界を変える契機を引き起こしてくれるとも言えるだろうが、その意味については今回は述べない。「少女性」を備えていた個人が、これまでの「楽園」のような世界から追放されることにより、ついには苦難の多い現実の世界で生きていくことを余儀なくされることは間違いない。だが、これはまた人が生きていく上で当然必要なことでもある。本論ではその点に関しては次の研究課題として考察を割愛することとし、「失楽園」せしめた「高慢」について専ら焦点を当てたいと考えている。

「少女性」は知るべきではないこと、知らなくても良いこと、手を出してはならない、手を出せない領域があるということをまた知らない。この点で「処女性」とは大きく性質を違えており、一見類似した心性のように見えて、意味を違えている。「処女性」とはマリアに見られたように、知らないものは知らないままにしておける、そのような心性である。

ここまで述べてきたように、マリアに見られる「不知」の態度は、「少女性」の「高慢」とは異なっている。「少女性」が世界を知らずして受け入れられないのとは異なって、「処女性」は知らずして受け入れられる力でもある。マリアはガブリエルに対して、彼女の受胎の意味も理由も、その神秘も明かしてくれと切望することはしなかった。当惑しながら、受け入れ難いと迷いながら、結局何も聞かないまま、「あるがままになるように」と心を決めて告知を受け入れたことは、エピソードに描かれている。これはマリアの「処女性」に拠るが、「処女性」とはどのような事態を受け入れても揺るがない主体性、独立性、自律性であって、だからこそ逆に、全てを受け入れることが可能になる。「処女性」が掌握しきれない世界をそのまま受け入れたとしても、「処女性」そのものは何ら損なわれることがないと確信できるからである。受け入れるのが正しいか正しくないかを自問する必要もない。「処女性」においては、どんなものを受け入れても、その独立性、主体性が損なわれる恐れはないからである。これが「処女性」の「穢れなさ」に他ならず、マリアは本当の意味での「処女性」を確立したと読み取れるだろう。マリアはその結果「神の子」を受胎したと考えられるが、マリアが孕んだのはまさに「神」であったと考えられるのかもしれない。

「神」になりたいと切望した「少女性」と「神」をその身の内に宿した「処女性」とは、ここにおいても大きな差が見出せるのではないだろうか。「神」とは世界そのものであると考える時に、そこには世界と自己との距離の取り方というものが伺えるように思われる。

## 7 「少女性」と「処女性」 ――その世界のあり方

マリアと対比できる、イブの「少女性」においては、「知らない」ことが許されないということはここまで述べてきたとおりである。「少女性」は緊急的に世界を、つまり対象を知っておらねばならず、それは世界と自己との関係が未分化であることに起因すると考えられる。『創世記』においてイブはアダムの肋骨より作られたとされている。ここからも見られるようにイブの他者との関係は完全な一体的結合として捉えられ、この二者の間には自他関係は存在しなかった。(玉谷 1985)「我が肉よりの肉、我が骨よりの骨」とアダムがイブを呼んだことからも、二人の関係には分離は存在せず、完全なる合一として結びついていたことが伺われる。このような他者関係のあり方においては、自他は未分化であり、同一化してしまっていると考えられる。このような二者関係は原初の母子一体感にも類似していると想像できるが、互いの間の距離を適切に確保することはできていない。一方の人間の、相手の見る目は直接的であり、自身

を眺めるように相手を見ることになってしまうため、その眼差しは欲求的、自体愛的なものにならざるを得ない。冷静に、自己とは異なる存在として対象を見るためには自己と対象の間に適切な距離が必要となる。この距離がないとなると、対象を「知ろう」という態度は直截的、衝動的になってしまって、対象を「知らない」ということが許されなくなるのかもしれない。このような自他未分化の、分離がなされていない対象関係においては、互いは常に緊急的に知っておかねばならず、それ故に見ないでおくことができなくなる。これはイブの態度の説明になる。イブは他者であるアダムとも未分化に結びついていたが、禁忌を与えた神とも、説話的にも未分化であった。神とアダムとイブは「三位一体」として存在していたと説明される。イブはその「少女性」のために世界を掌握する神になりたいと憧憬したが、彼女と神は真実、未分化だったということである。彼女は神そのものであって、彼女を取り巻く世界そのものであったと考えることができるのである。「神」とは「世界」の真理を掌握する、「世界」の創造者であって、統治者であるからである。

ここに「少女性」の世界のあり様をまず伺うことができる。

「神の子」を受胎したマリアへ一方目を向けると、「処女性」と「世界」とのあり様を読み解くことができるだろう。マリアは受胎告知の場面において、イブ同様「知らなくても良い」というタブーを課せられたが、結局、彼女の身に起こる事柄の真実全てを彼女が知らされることはなかった。端的にこれから起こりうる現実について述べられただけのマリアであるが、マリアは知らないことは知らないままに、あるがままを受け入れることを選んだ。彼女は「知らない」ことで彼女の独立性を揺るがされることがなかったからであり、同時にこのような態度を持つことで対象の側の独立性を守った形になると考えられる。マリアに見られる「処女性」の「不知」は対象の秘密を侵すことはしない。何をおいても知らなければならないという態度は、対象と主体との間に距離が保てていないために生じる衝動であると「少女性」において述べたが、マリアはこの二者の間に距離を適切に保てていたと考えられる。自己と他者、自分と世界は互いに独立物であるとマリアは客観できているために無理に対象を知ろうと踏み込む必要が無いわけであり、またそうせずに済む心性が「処女性」であると考えられる。これが「処女性」とそれを取り巻く「世界」とのあり方であると考えられる。

マリアと、告知をもたらした大天使ガブリエルの間、また神の間には明確な自他関係が確立されており、その上で彼女たちは密接な結合を成し遂げているとこの場面は説明されている。このような関係を「不一不二」もしくは「矛盾的相即」と玉谷（1985）は呼び、以下のように記述している。

「不一不二とは、一であるということが同時で二であり、二であることが同時に一であることを意味し」ている。対象と主体は一体であるが二つであって、二つであるが一体であるという意味である。一体でありながら別々の存在であるということは、一人の人間の目の中に自分の自我を中心に考えないという自我否定を媒介にした自己の新生がなされていなければならず、この新たに生まれた目が、対象を独立した存在として客観的に見ることを可能にする。その目は自我の傍らに寄り添う客我と呼べるのかもしれないが、この客我はまた客観でありながら、同時に一つの人間の主観であって、ここでは矛盾を孕みながら成り立つ目が存在することになる。このような、二つの事物が矛盾しながら相即している関係を、「矛盾的相即」と中山（1973）はまた呼んでいる。

マリアが対象と結んだ関係はこのような「不一不二」、「矛盾的相即」の関係であり、このような関係を結んだ彼女が、「神の子」を受胎した、というのはなるほど彼女の世界との関係をそのまま象徴しているようにも汲み取れる。神とは世界であるとも考えられるとはここまで述べてきたとおりであり、彼女は彼女を取り巻く世界をその身に内包しながら、同時に別々の存在として距離を取り、自他を分化していると考えられる。互いを独立したものとして客観できる彼女の態度は、「処女性」の、世界を知らずしても自己が損なわれることがないという、そのような自律性、独立性に起因するものと考えられる。この「処女性」があればこそ、「処女性」の世界では秘密は秘密のままに、知らないことは知らないままにしておける。対象の秘密を暴くことは、対象の独立を損なうことでもある。互いの独立性、主体性を守るために知らないことは知らないままにしておくことが必要なのであり、これが「処女性」の「穢れなさ」であると考えられる。

個人の知り得ないどのような世界を受け入れて尚、揺るがずに保っていられる自律性、それがマリアが

体現した「処女性」のあり方であり、「処女性」と世界とのあり方と考えることができるだろう。

## 8 終わりに

マリアはイブが犯した「原罪」を償い、人類を救済する手助けを、イエスをこの世に送り出すことで完成させたと説かれている。(竹下 1998) 宗教的な意味合いはここでは考察しないこととして、心理学的にはイブの「少女性」からマリアの「処女性」へと女性が推移していったと考えると興味深い。発達心理学的に「少女性」から「処女性」へと段階を踏み、発達していくというプロセスを仮定することはできないと思われるし、そもそも「少女性」と「処女性」が同じ発達ライン上に存在する段階とも限らない。だが、この二つの心性がこのような順序で獲得され得る、という示唆であると考えると、この逸話に見られた推移にその意味を伺えるのかもしれない。

ここまで「少女性」との比較を通して「処女性」に関する考察を行ってきたが、無論、この二者に発達的な優劣があると定義しているつもりはないし、心性としてどちらに優劣をつける意図もない。本研究の目的とは「少女性」との比較を通して「処女性」という心性の本質を明らかにすることである。「少女性」には「少女性」の特質があり、それを生かすことで人は豊かに生きることもできるだろう。「少女性」の特質は「処女性」の持ち得ないそれでもあって、それぞれをより生かせることに意味があると筆者は考える。その上で「処女性」という心性の意味を改めて問いなおすと次のように一つは言えるだろう。

「処女性」とは、どのような運命、身に起こる現実を受け入れて尚、自我を揺るがされない強さでもある。ありのままで良いと受け入れられるこのような力を備えることで、人は謙虚に、同時にしたたかに生きていくことが可能になる。こうなりたいと望む理想像に向かって邁進していくことは、人にとって必要である一方、過ぎた理想像は自身とのギャップのために、時に自我を窮地に追いこんでしまうこともあるかもしれない。「少女性」に囚われた少女は、例えば、自分の思うままにならない身体を持つ「女性」になりたくないと成熟を拒み、自身の身体を自然の流れに逆らってコントロールしようと試みることなどもあるだろう。成熟した女性の身体は初潮を迎え、子を孕む準備を整える。そんな己の「意のままのならなさ」を克服しようと過度の自己節制の結果、痩せ衰えてしまう若い女性などは一つに「少女性」に囚われ過ぎたと考えることができる。自分の身に起こる運命をありのままに受け入れ、「これで良い」と受け止められる力が、このような女性たちにはとても有効になるのである。そしてこのような「これで良い」と受け入れられる力、心性こそが「処女性」であると筆者は考えている。

「処女性」においては、受け入れるに当たって、そこに明確な、現実に理解でき得るレベルの理由はない。河合 (1994) は「知りたい」と欲求する心、つまり「好奇心」をどこでストップさせるかについての判断について、このような判断はとても難しく、以下のようなものであると述べている。

> その判断は考えてわかるものではない。これはいわゆる知識に基づいてなされた知的判断ではなく、彼女の全人格的な反応として「ここまで」という判断が生じたと言うべきであろう。
>
> 元型的なものは個人の全人格をかけた決定を要請し、それのみがその場面に正しい答えを与えることができるのである。(河合 1994 55頁)

良いから良いと、現実の道理には何を問うこともせずに確信できる、それが「処女性」であると考えられる。このような意味で「処女性」とは智慧であるとも考えられ、マリアが受胎告知の場面において聖霊(ソフィア)と結びついたことは意味深いものとまた読み取ることができるかもしれない。マリアは「ここまでで良い」「これ以上は知るべきではない」という判断を下すことができる智慧を身に付け、同時に知らなくても自己を揺るがされることのない独立性を確立できたということになろう。

そしてこのような「処女性」を獲得することは、女性にとって、引いては男性にとっても意味のないことではないと言えるだろう。

冒頭に述べた繰り返しになるが、「処女性」とは必ずしも獲得しなければならない心性ではないにせよ、

獲得すれば、また豊かな人生を送れるかもしれない、そのような種類である。

「処女性」がどのような過程を経て獲得されるかに関しては、今回は一切触れなかった。より根源的な、元型的な意味についてもあまり考察を加えることはできなかったけれども、「処女性」というもの、同時に「少女性」というものの姿の一端は説明できたのではないかと考えている。

今回説明した「少女性」はまた元型論における「プエラ」とも深く関わりを持っていると考えられるが、殆どその関係を述べることもできなかった。これらを今後の課題とし、より深い、精密な考察が加えていければと思っている。

＜引用文献＞

旧約聖書創世記 1991 関根正雄訳 岩波文庫 岩波書店

新約聖書共同訳・全注 1981 堀田雄康校註 講談社

Cotterell,A 1986 A Dictionary of World Mythology(New Edition)Oxford University press 左近司祥子・宮本啓一・瀬戸井厚子・伊藤克巳・山口拓夢・左近司彩子訳 『世界神話辞典』 柏書房 1999

Devereux,G. 1982 FEMME ET MYTH, Flammarion 加藤康子訳 『女性と神話－ギリシャ神話に見る両性具有』 新評論 1994

Estes,C.P. 1992,1995 Women Who Run With the Wolves: Myths and Stories of the Wild Woman Archetype 原真佐子・植松みどり訳 『狼と駈ける女たち－「野生の女」元型の神話と物語』 新潮社

藤澤佳澄 2001 「女性同士の結びつきに関する一考察」 大阪大学大学院人間科学研究科修士論文（未公刊）

Jordan,M. 1993 Myths of the World. A thematic encyclopedia, Kyle Cathie Ltd. 松浦俊輔他訳 『世界の神話』 青土社 1996

河合隼雄 1994 『昔話の深層－ユング心理学とグリム童話』 講談社＋α文庫 講談社

河合隼雄 1991 『とりかへばや、男と女』 新潮社

河合隼雄 2000 『紫マンダラ－源氏物語の構図』 小学館

北山修 1982 『増補・悲劇の発生論』 金剛出版

中丸明 1999 『聖母マリア伝承』 文芸新書 文芸春秋

中山延二 1973 『阿弥陀仏の論理的理解』 百華苑

小田亮 1996 『性』 三省堂

長田年弘 1997 『神々と英雄と女性たち』 中公新書 中央公論社

Qualls-Corbett,N. 1998 The Sacred Prostitute. 菅野信夫・高石恭子訳 『聖娼－永遠なる女性の姿』 日本評論社

高原英理 1999 『少女領域』 国書刊行会

玉谷直実 1985 『女性の心の成熟』 創元社

竹下節子 1998 『聖母マリア』 講談社選書メチエ 講談社

von Franz,M.L. 1974 Problems of Feminine in Fairy Tales, Spring Publ. 秋山さと子・野村美紀子訳 『メルヘンと女性心理』 海鳴社 1979

# A study on "Virginity"of Women －compared with "Girlhood"

FUJISAWA Kasumi

Generally, the term "Virginity" means women who have had no sexual experience, but in ancient Greece,"Virginity" means the quality of women who have self-reliance and autonomy, which is derived from the Greek word, "Parthenos".

In this study I examined the famous episode of Virgin Mary, "the Annuciation" and I defined "Virginity", comparing with the concept of "Girlhood"of Eve in Old Testament. Since "Virginity" makes women independent, they can face any reality which has been unexpected or is beyond control. That is why Virgin Mary could receive the unexpected fate. And it was discussed that not only for women but for men to acquire this "Virginity" is significant.